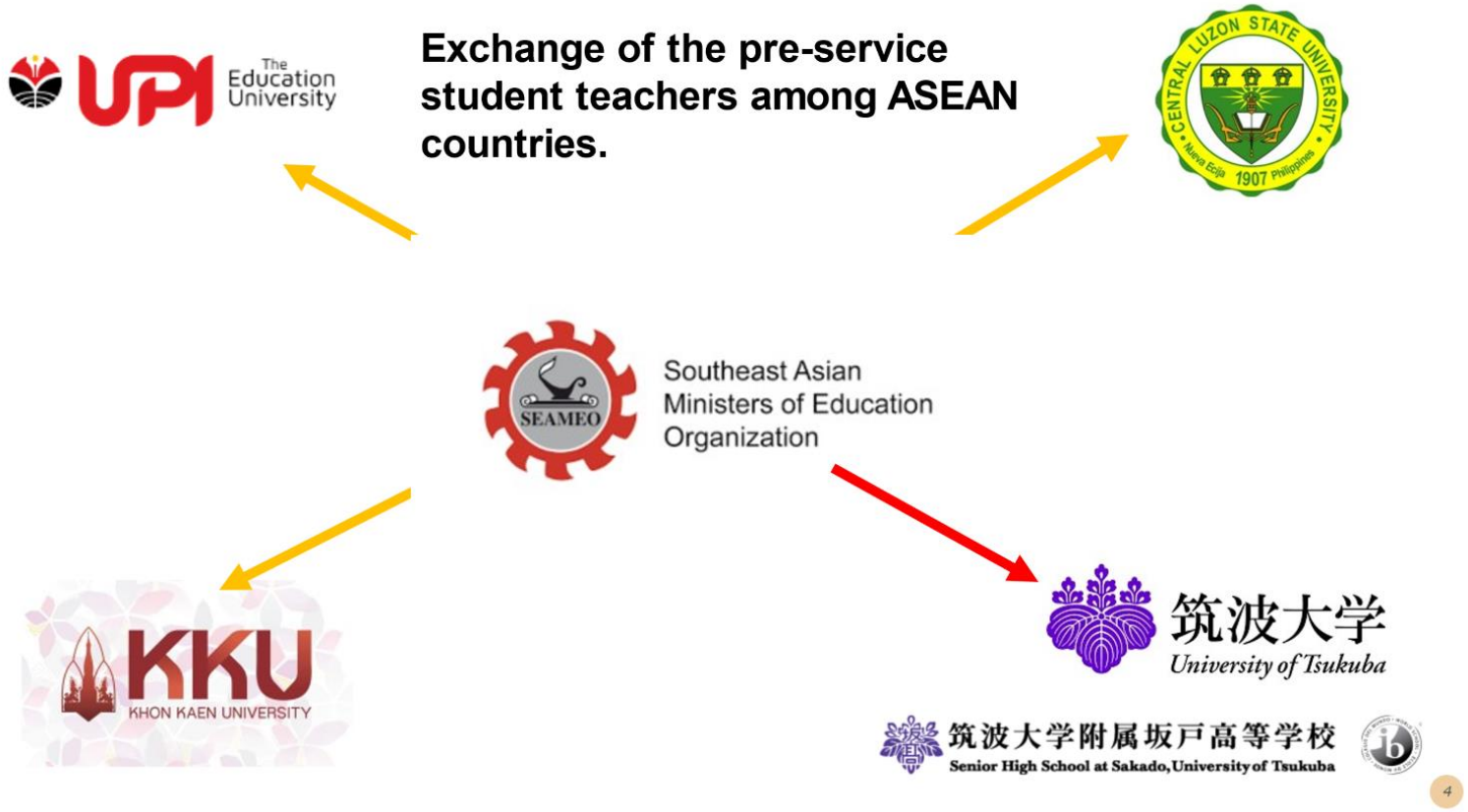
令和４年度 新時代の教育のための国際協働プログラム

教職員交流を通じた国際比較研究事業シンポジウム2023 提言

~ESD for 2030 を担う教員養成のための国際協働教育実習プログラムの開発~



筑波大学・筑波大学附属坂戸高等学校

1. 調査・研究概要

■調査・研究名称

ESD for 2030を担う教員養成のための国際協働教育実習プログラムに関する国際比較研究

■事業期間

令和４年１１月２１日～令和５年３月１５日まで

■教員交流参加者の情報（所属機関の種別・人数など）

（派遣）12名（高等学校教員11名、大学職員１名）
（招聘）12名（高等学校教員12名）

■連携機関名

SEAMEO（東南アジア教育大臣機構）、駐日インドネシア大使館

1. 調査・研究概要

■教員交流対象国・機関名

＜**インドネシア**＞
インドネシア教育大学・インドネシア教育大学附属高等学校
ボゴール農科大学・ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校

＜**タイ**＞
コンケン大学・コンケン大学附属高等学校
カセサート大学・カセサート大学附属高等学校

＜**フィリピン**＞
セントラルルゾン州立大学・セントラルルゾン州立大学附属高等学校
フィリピン大学・フィリピン大学附属ルーラル高等学校

２．教員交流プログラムの概要

■事前調査

日本国内では、国を越えた教育実習は実施されていないため、COVID-19の発生前の2020年2月に、SEAMEOのパイロット事業として、筑波大学附属坂戸高等学校で実施したプログラム内容の整理と、SEA-teacherの現状（プログラムの実施時期、実施期間、受け入れ科目、指導体制等）について、海外の論文の調査や、インドネシア、タイ、フィリピンの連携機関や協力機関の協力のもと、実態把握を行った。

また、2020年2月に日本での、SEA-teacherパイロットプロジェクトに参加したインドネシアおよびフィリピンの学生から、プロジェクト参加の成果についてメール等により聞き取りを行った。

■交流国選定の理由

SEAMEOにおける国内唯一の提携機関（Affiliate member）である本学に、SEA-teacher事業への参加打診があった。2019年度に本学学生をインドネシア教育大学、コンケン大学、セントラルルゾン大学に各２名計６名派遣し、３大学からも各２名計６名を附属坂戸高等学校（以下：筑坂）を受け入れ高校として、SEA-teacherパイロットプログラムとして双方向な形で実施した実績がある。その際に、国を越えた教育実習が、「ESDやグローバル教育を担当できる教員の養成」に果たす大きな可能性を感じた。

また、筑坂は、インドネシア、タイ、フィリピンに国際連携協定校を有しており、附属高校および大学が連携することで、本事業の目的を達成できると考えたため、この3か国を交流国に選定した。

２．教員交流プログラムの概要

■事前調査、交流プログラム作成、および提言作成のうえで、以下の文献等を国際比較研究のためのおもな題材とした(海外文献)

Anyolo, E.O., Kärkkäinen, S., & Keinonen, T.(2018). Implementing Education for Sustainable Development in Namibia: School Teachersí Perceptions and Teaching Practices, *Journal of Teacher Education for Sustainability, 20(1)*, 61-81.

Chrisie, U.M. & Ariyanti.(2020). SEA-Teacher Students' Perspective: Challenges Teaching English Overseas in the Philipines, *Borneo Educational Journal, 2(1),* 14-19.

Ima, W. & Kewwalee, K.(2019). A reflective study on SEA Teacher Practice:from Thailand to Indonesia, *TAMANSISWA INTERNATIONAL JOURNAL IN EDUCATION AND SCIENCE,1(1)*,9-14.

Lalu, R. T. S., Lalu, Z., Imam, B., Jannatin, 'A. , Dadi, S., & Wildan, W.(2020) University of Mataram in SEA Teacher Project: Lesson Learned From Students' Perspectives and Self-Reflection*, Advances in Social Science, Education and Humanities Research Proceedings of the 1st Annual Conference on Education and Social Sciences* ,24-26.

Nurwidodo, N., Amin, M.,Ibrohim, I., & Sueb, S.（2020）． The Role of Eco-School Program (Adiwiyata) towards Environmental Literacy of High School Students*, European Journal of Educational Research, 9(3),* 1089-1103.

Petra, B., Martin, S., & Gregor, T. (2020). Understanding of Sustainability and Education for Sustainable Development among Pre-Service Biology Teachers, *Sustainability,12*, 6892.

Sherly R. & Fitri K.(2020). Voicing the Unvoiced Indonesian SEA Teacher Teaching in the Philippines: A Phenomenological Study, *International Journal of Innovation, Creativity and Change,12(6),*45-55.

Stapleton, S. R.（2019）． A case for climate justice education: American youth connecting to intragenerational climate injustice in Bangladesh*, Environmental Education Research, 25(5)*, 732-750.

Venna, S. N. N., & Achmad, B. M.(2021) . Indonesian Pre–Service Teachers' Intercultural Awareness in SEA Teacher Project, Advances in Social Science, Education and Humanities Research, volume 595 (Proceedings of the Fifth International Conference on Language, Literature, Culture, and Education (ICOLLITE 2021)), 695-701.

Wahyu, A.E., Yulius, T., & Sitti(2022). The Effect of SEA-Teacher Mentoring on The Students' Intrinsic Motivation in Teaching Practice, *Journal of Teaching of English 7(4),* 91-97.

２．教員交流プログラムの概要

■事前調査、交流プログラム作成、および提言作成のうえで、以下の文献等を国際比較研究のためのおもな題材とした(国内文献)

市瀬　智紀（2020）．ユネスコの推進する価値教育の学校現場における受容と変容の研究　「持続可能な開発のための教育（ＥＳＤ）」を事例として　東北大学大学院教育学研究科博士論文

礒田　正美・野村　名可男・建元　喜寿・竹中　絵美（2020）：SEA-Teacher パイロットプログラム実施報告書（2019 年度実施） 筑波大学教育開発国際協力研究センター

永田　佳之（2020a）．‘ESD for 2030’を読み解く：「持続可能な開発のための教育」の神髄とは，ESD研究, *3*，5－17.

及川　幸彦（2022）．持続可能な開発のための教育（ESD）に関するユネスコ世界会議とベルリン宣言 ESD研究,*5*,93-106.

岡田　真理紗（2020）．外国人増加への期待と不安:「外国人との共生社会に関する世論調査」から放送研究と調査，*70（8）*，78-87.

岡村　郁子・黄　美麗・竹田　恒太(2019)．留学生急増国における日本へのプッシュ要因とプル要因についての検討　　ベトナム、ミャンマー、インドネシア、スリランカを中心に　留学交流, *105*,15-28.

白井　俊（2020）．OECD Education2030　プロジェクトが描く教育の未来ーエージェンシー・資質・能力とカリキュラム，ミネルヴァ書房。

２．教員交流プログラムの概要

■事業テーマに関する現状の問題点

問題点：

①日本における教員養成課程は、教科指導に関する内容が主であり、グローバル教育に関する講義や実習は極めて稀である。

②すでにアセアン諸国では、国を越えた教育実習を実施しており、グローバルマインドをもった教員養成の分野では日本は後れを取っている。

国際的な協働が重視されるSDGsの時代においては、すべての教員がグローバルな視点を持つことを求められる。教職を志望する大学生が、海外の学校で教育実習を行い、授業実践や、現地の学校や教職員と学生時代に国際的なネットワークを構築できるような経験を積むことができれば、国際的な文脈をもつESDの推進とSDGsの達成に大きな意味をもつといえよう。

現職教員が、海外に渡航し研修を積む機会も重要であるが、財政上、業務上の制約もある。そこで、日本の学校で、海外からの教育実習生をうけいれることができれば、現職教員や生徒にも、国際理解を深める貴重な機会となりうるであろう。

■問題点を解決するための課題設定

課題設定：

①日本で、SEA-teacherを実施していくには、どのような点が課題となるかを明らかにする

②現職教員が国際教育実習の指導を行う中で、英語に対する苦手意識を低減させ、教科を問わず指導を実施できるようになる。

①SEA-teacherを受け入れている学校や、これまで交流実績のあるアセアン諸国の学校を訪問・交流を行い、これまでのSEA-teacherの受け入れ状況や、ESDやSDGｓに関連した探究活動の状況の把握を行う。

②日本で実施されているSEA-teacherパイロット事業実施時期にあわせて、海外から現職教員を招聘し、これまでの実施状況の共有、受け入れに関する要点などを学ぶ機会を創出する。

２．教員交流プログラムの概要

■交流スケジュール（派遣）

１）令和4年12月11日～令和4年12月15日
教員5名：タイ

コンケン大学附属高等学校 カセサート大学附属高等学校

２）令和4年12月21日～令和4年12月27日
教職員５名：インドネシア

インドネシア大学附属高等学校 ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校

３）令和５年3月6日～令和5年3月9日
教員２名：フィリピン

セントラルルゾン州立大学附属高等学校 フィリピン大学附属ルーラル高等学校

日本とインドネシアをZOOMでつなぎ、ハイブリッド形式で協議会を開催する（令和4年12月23日＠インドネシア教育大学）

日本のESDや探究学習について説明を行う、日本人教員（令和4年12月22日＠ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校）

２．教員交流プログラムの概要

■交流スケジュール（招聘）

令和５年2月７日（火）～令和５年2月１２日（日）

おもな交流プログラムの内容

2月8日	水	・筑波大学における協議会 ・筑波大学に留学している各国からの留学生との交流会
2月9日	木	・筑波大学附属駒場高等学校における授業見学と協議会 ・筑波大学附属学校教育局における協議会
2月10日	金	・SEA-teacher実習生の授業見学 ・大豆を教材にしたESDワークショップ ＠筑波大学附属坂戸高等学校
2月11日	土	・第26回総合学科研究大会 ・SEA-teacher研究協議会 ＠筑波大学附属坂戸高等学校

4か国で共通して利用されている大豆を教材としたESDワークショップを実施。各国のノウハウの共有と、国を越えて実施できるESD教材の検討を行う。

SEA-teacher受け入れ経験を各国からの訪問団に報告するインドネシア教育大学附属高校の教員

2．教員交流プログラムの概要

■交流成果の共有・発信

1）第26回総合学科研究大会における全国発信

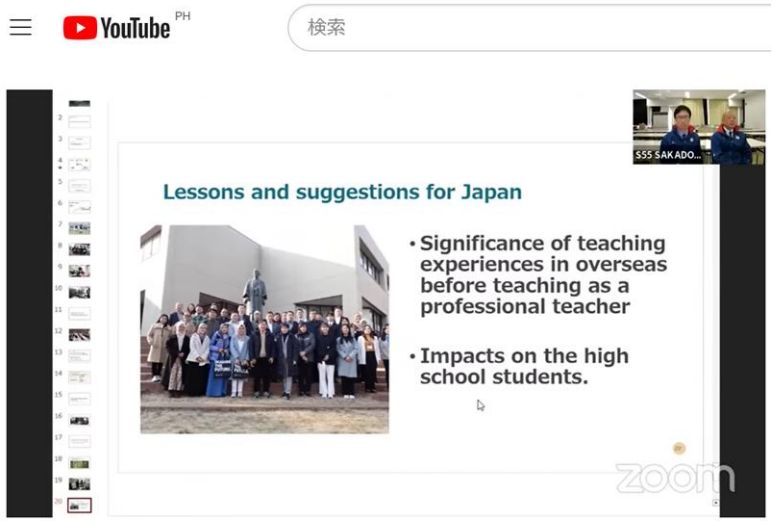
令和5年2月11日（土）

2）11th SEAMEO-University Of Tsukuba Symposiumで成果報告

令和5年2月22日（水）

3）埼玉県越生町における「梅凛フェス」に参加

令和５年2月25日（土）



[Zoom] 11th SEAMEO-University of Tsukuba Symposium (DAY3: Wed22 Feb 2023 9-11.45am)

SEAMEOの国際会議における発表の様子は、以下のURLからアーカイブ配信が実施されている

https://www.criced.tsukuba.ac.jp/math/seameo/2023/

梅林に、日本の高校生とアセアン各国からの教育実習生が協力し、竹を活用したランタンを灯す。地域学習とグローバル教育の融合

３．提言

■提言1：大学の附属学校がハブとなり日本のSEA-teacher参画の促進を図る

１）現状の日本国内の教育実習システムは、SEA-teacherを日本で実施していくうえで、十分なベースとなることがわかった。学習指導案の作成を行い、実際に授業を実施し、振り返りを行い、次の授業に活かしていく流れは、各国ともほぼ同様な流れであった。

２）国際教育実習は、教科を問わず、すべての授業は英語で実施されている。日本においても、英語以外の教科の授業もすべて英語で実施した。これまで、英語、数学、理科において国際教育実施の事例が多く報告されているが、2023年2月の第2回SEA-teacherパイロットプロジェクトでは、本教員交流事業でタイに派遣された農業科教員が中心となり、英語科教員との協働のもと、農業の授業および総合的な探究の時間の授業で国際教育実習生を受け入れ、英語による授業が展開された。今回の交流経験は他校で実施する場合の参考となりうる。

■提言２：日本の通常の教育実習期間中に、SEA-teacherの学生の受け入れも行いより多くの日本の大学生がグローバルな経験を国内でもつめるようにする。

１）現在、SEA-teacherプログラムは、おもに1月と7月に実施されている。この時期は、日本の大学生の教育実習期間と重ならない場合もある。双方の実習の実施時期を共通の時期に設定できれば、日本人教育実習生が、海外からの教育実習生と、同時に実習に取り組むことができ、国際的な協働体験を日本国内においても経験できることとなる。

２）教育実習の事前指導も、ZOOM等を活用することで、実施可能であることが本事業であきらかとなった。今後、教員養成分野においても、ボーダレスな学びあいが促進していくことが予想される。事前指導はオンラインで、教育実習は各国の学校現場で行うことは十分可能であると考えられた。

３．提言

■提言３：Transnational Student-Teachers’ eXchange Program（T－STEP）の創設と実装

１）アセアン諸国で実施されているSEA-teacherプログラムをモデルとし、柔軟な政策展開（制度設計、単位認定）や財政支援のもと、、国際教育実習を国内に実装していくことは、日本社会のグローバル化にも対応できることとなり、共生社会や持続可能な社会づくりにつながっていく可能性がある。

２）総合的な学習の時間の指導法と国際教育実習とを連動させ、教科に関わらず希望するすべての教育実習生がESDやグローバル教育に関する経験をつめるような体制の整備が重要であろう。

３）今回のように、現職教員を相互に派遣し合うプログラムは、国を越えた相互理解につながり、各国の学校で国際教育実習を受け入れの促進につながる。今後も、相互交流の促進や、受け入れノウハウの発信・普及が望まれる。

４）今後、国際教育実習を受け入れた実習協力校の現職教員や生徒へのインパクトや、国際教育実習を経験した学生が、教員になり、学生時代の国際経験を学校現場でどのように生かしているのか、また、国際的なネットワークを維持継続しているかといった調査を、中長期的に行っていく必要がある。

皆様方と、未来にむけ、国際教育実習のネットワークを広げていければ幸いです。

ありがとうございました。Terima kasih banyak　ขอบคุณค่ะ　Salamat po